

# 吉塚8

—吉塚遺跡群第9次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第778集

2003

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する吉塚遺跡群第9次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで高田庄蔵様をはじめとする関係各位のご理解を賜り、費用負担をはじめとするご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成13年度に博多区吉塚3丁目19において実施した吉塚遺跡群第9次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家、坂本真一、林田憲三が行った。
4. 製図は長家、坂本が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし(一部欠番あり)、報告の際には遺構の性格を示す略号をして表記している。略号は堅穴住居跡(SC)、土坑(SK)、溝(SD)、井戸(SE)、ピット(SP)である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0130	遺跡略号	YSZ-9
所在地	博多区吉塚3丁目19	分布地図番号	35-0123
開発面積	1,700m <sup>2</sup>	調査対象面積	380m <sup>2</sup>
調査期間	平成13年10月22日～平成13年11月7日	事前審査番号	12-2-791

## 本文目次

I	はじめに	
1	調査にいたる経過	1
2	調査体制	1
II	調査の記録	
1	調査の経過	1
2	遺構と遺物	7
1)	堅穴住居跡	7
2)	井戸	7
3)	溝	18
4)	土坑	22
5)	包含層出土の遺物	24
6)	その他の遺物	27
7)	小結	27

## 挿図目次

第1図	調査区位置図1(1/50000)	2
第2図	調査区位置図2(1/8000)	2
第3図	調査区位置図3(1/500)	3
第4図	調査区全体図(1/100)	4
第5図	調査区内土壠図(1/100)	6
第6図	SC01実測図および出土遺物実測図(1/40, 1/3)	8
第7図	SE02実測図(1/30)	9
第8図	SE02出土遺物実測図1(1/3)	10
第9図	SE02出土遺物実測図2(1/4)	11
第10図	SE07実測図(1/30)	12
第11図	SE07井戸枠内面実測図(1/20)	14
第12図	SE07井戸枠外側実測図(1/20)	15
第13図	SE07出土遺物実測図1(1/3)	16
第14図	SE07出土遺物実測図2(1/2, 1/3)	17
第15図	SE07出土遺物実測図3(1/6)	18
第16図	SD03-05-08実測図(1/160, 1/60)	19
第17図	SD03-05出土遺物実測図(1/3)	20
第18図	SD08出土遺物実測図(1/3, 2/3)	21
第19図	土坑実測図(1/30)	23
第20図	土坑出土遺物実測図(1/3)	24
第21図	包含層出土遺物実測図1(1/3)	25
第22図	包含層出土遺物実測図2(1/3)	26
第23図	その他の遺物実測図(1/3)	27

## 写真目次

写真1	調査区全景(北西から)	写真8	SE07土層(南西から)
写真2	調査区南端部全景(北西から)	写真9	SE07井戸枠内面(南東から)
写真3	西壁土層	写真10	SE07井戸枠内面(南西から)
写真4	東壁南端部土層	写真11	SE07C面外側(南東から)
写真5	SE02-井戸枠は上段一(東から)	写真12	SE07A・B面外側(北から)
写真6	SE02下段井戸枠(西から)	写真13	SD08(南東から)
写真7	SE07(北東から)	写真14	SD08土層

## I はじめに

### 1 調査にいたる経過

平成12年12月25日付けで高田庄蔵氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区古塚3丁目19の物件に関して、共同住宅建築に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号12-2-791)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である吉塚遺跡群(分布地図番号35-0123・遺跡略号YSZ)に含まれているところである。申請者と協議の上平成13年8月28日に申請地内の試掘調査を行い、現況から80cmほどで砂丘面に至り柱穴等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果、共同住宅建設部分については遺構の破壊が避けられないため、平成13年度に発掘調査、平成14年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成13年10月22日～平成13年11月7日である(調査番号0130)。なお発掘調査は敷地面積1700m<sup>2</sup>のうち、南側にあたる共同住宅建設部分(380m<sup>2</sup>)を対象とし、それ以外の駐車場用地等は現状保存することで契約を締結した。調査面積は256m<sup>2</sup>、遺物はコンテナ26箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては高田庄蔵様をはじめとして関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

### 2 調査体制

事業主体 高田庄蔵

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治(前任) 田中寿夫(現任)

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

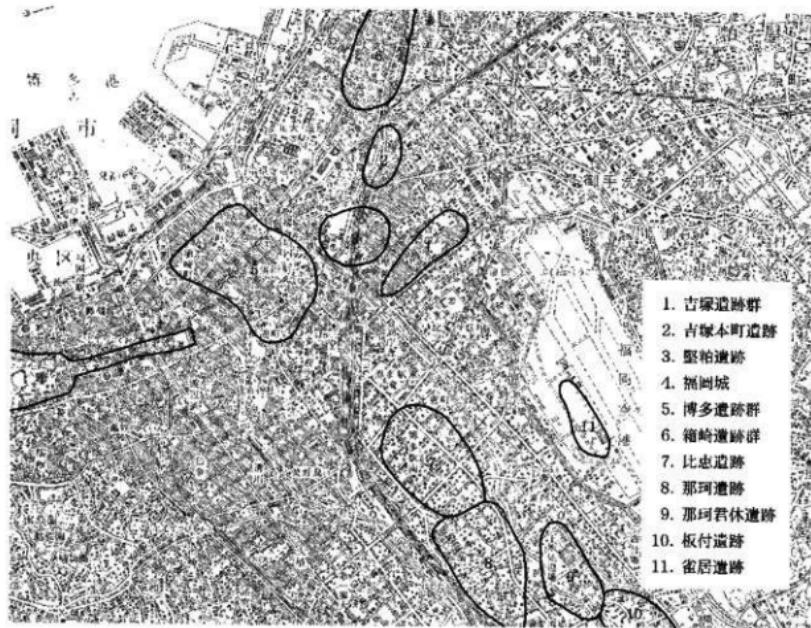
調査担当 調査第2係 長家 伸

なお調査・整理作業には多くの方々にご協力を頂いた。ここで感謝の意を表したい。

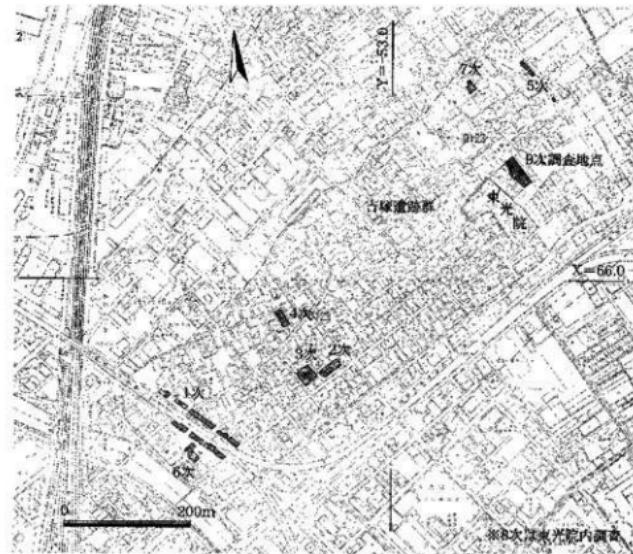
## II 調査の記録

### 1 調査の経過

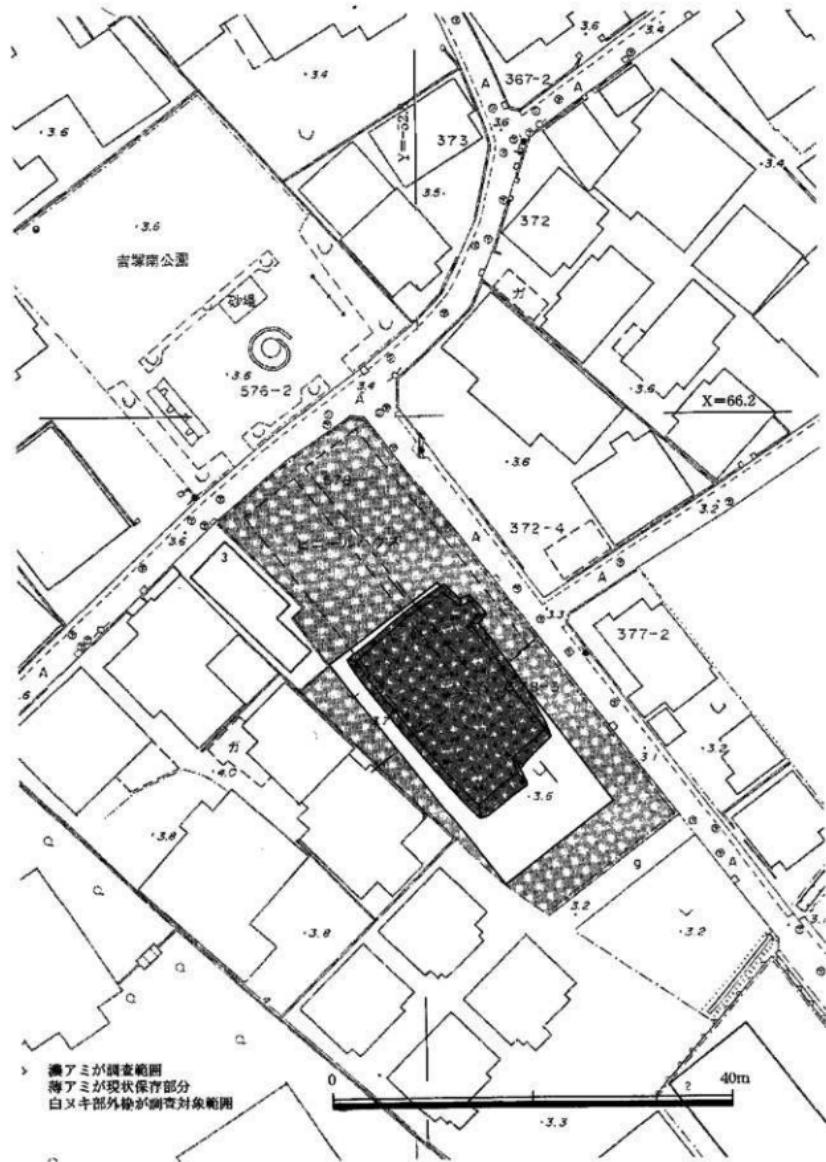
古塚遺跡群は博多湾岸に形成された砂丘上に立地する遺跡である。箱崎遺跡群から博多遺跡群に至る南北に伸びる砂丘の中央部分にあたり、後背地に向かってやや南東方向に砂丘が張り出す先端部分に位置する。周辺には前述の2遺跡のほか古塚祝町遺跡・堅粕遺跡・古塚本町遺跡などの砂丘鞍部によって画される一連の遺跡群が知られており、それぞれで発掘調査が行われている。これまでの調査成果によればこの砂丘上には弥生時代以降豊富な遺構・遺物確認されており、注目される遺跡群を形成している。なお周辺の調査事例については各報告を参照されたい。また調査地点西側に隣接して東光院が立地する。藤原時代の作といわれる薬師如来立像を本尊とし、「筑前国続風土記」では806年の創建とされているが、詳細は不明である。境内の確認調査により、当院建立に伴う可能性を考えられる後背湿地の埋め立てが確認され、この埋め立て土中から12・13世紀代の瓦が多量に出土している。またこの盛土上層には中世末前後の焼土層も確認されている。



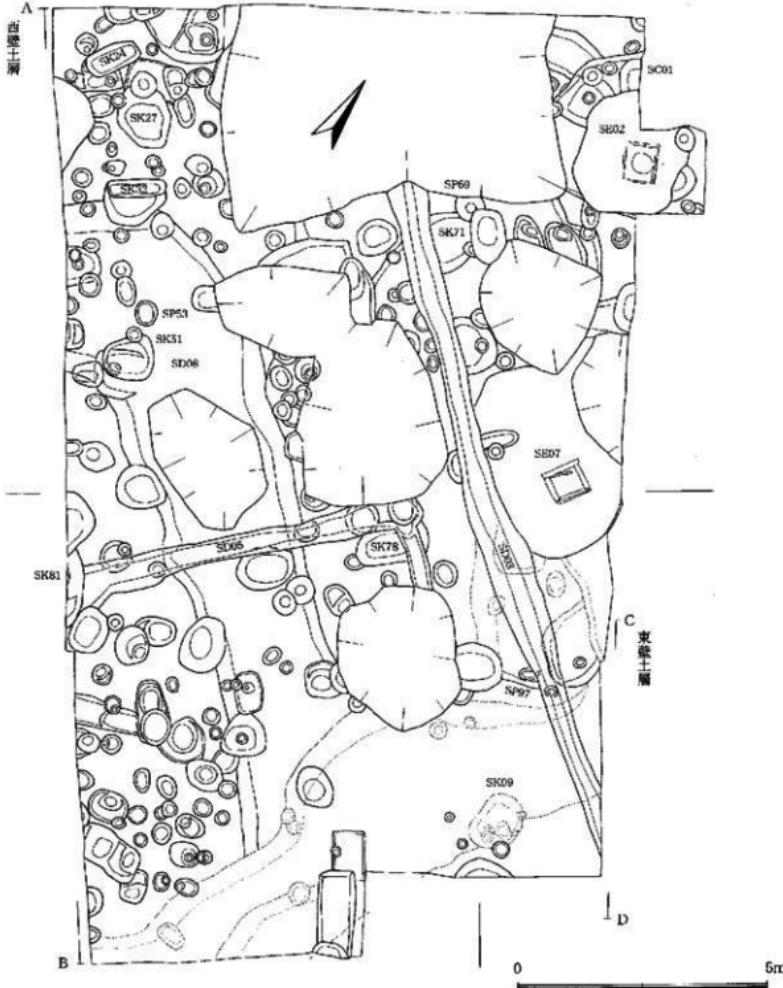
第1図 調査区位置図1(1/50000)



第2図 調査区位置図2(1/8000)



第3図 調査区位置図3(1/500)



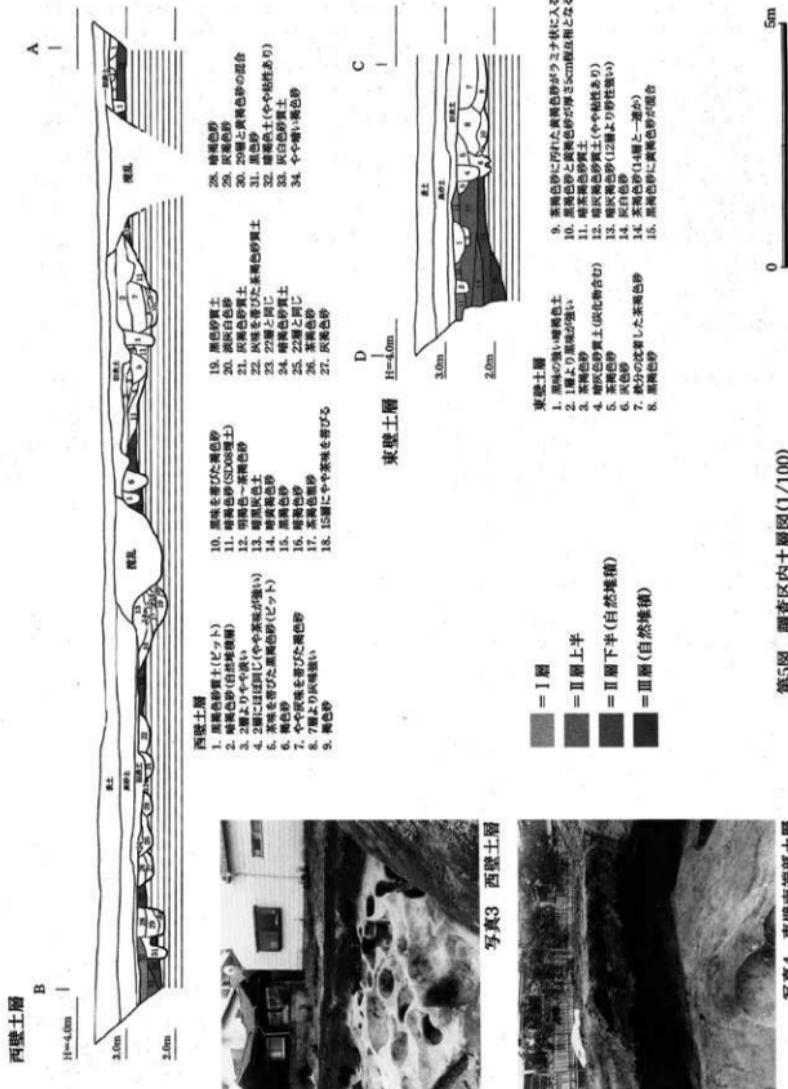
第4図 調査区全体図(1/100)



写真1 調査区全景(北西から)



写真2 調査区南端部全景(北西から)



調査地点は調査前には畑として使用されており標高約3.6mを測るほぼ平坦な敷地であった。I章で述べたように調査対象地は申請地の南半部分にあたる。調査は重機による表土除去から行い、遺構の広がりを確認した後に南側へ調査区を拡張した。対象地は以前には南側に一段低くなってしまっており、現状に整地する時点で真砂土を30cm程敷いており、その上部に耕作土を広げている。本来の砂丘高所での遺構面は盛土下の旧表土層を除去した明褐色～茶褐色砂上面(西壁12層)であるが、遺構が不明瞭な部分においては地山の黄褐色砂まで掘り下げて遺構を検出している。また本来の砂丘は調査区南端部分で落ち込みを見せるが、東光院内の調査でも確認された様に砂丘斜面部上層に遺物包含層(西壁32～34層、東壁11～15層)が存在し、この上面から遺構が掘削されていることが確認できた。これらの包含層の形成時期は明確ではないが、出土遺物および堆積状況から傾斜面の直上に堆積する東壁15層(包含層Ⅲ層)は弥生時代の自然堆積層、東壁14層・西壁12層・34層(包含層Ⅱ層下半)は上限が明らかでないが少なくとも古墳時代までには形成された自然堆積層と考えられる。さらに東壁11～13層、西壁32・33層(包含層Ⅰ層・Ⅱ層上半)が古代～中世前半までの大規模な整地層と考えられる。この結果、現況では標高2.8m前後で遺構面を設定した。

検出遺構は竪穴住居跡、溝、土坑、井戸、ピットがあり、時期的には古墳時代前期～中世前半までの遺構を検出している。また直接遺構に伴うものではないが弥生時代前期～中期に位置付けられる遺物も一定程度出土しており、周辺部分には当該期の遺構が存在していた可能性が考えられる。出土遺物の主体は古墳時代後期～古代に位置付けられるものである。

## 2 遺構と遺物

### 1) 竪穴住居跡

#### SC01(第6図)

調査区北東隅で検出する。掘り方のほぼ中央部分をSC02に切られている。平面はやや不整形で、壁高は10cmを測る。埋土は淡灰色砂である。床面が比較的平坦で竪穴住居跡としたが遺存状態が不良で遺構の性格については不明瞭な点も多い。土師器、須恵器、土錐が出土している。小田編年Ⅶ期に位置付けられる。

#### 出土遺物(第6図 1～4)

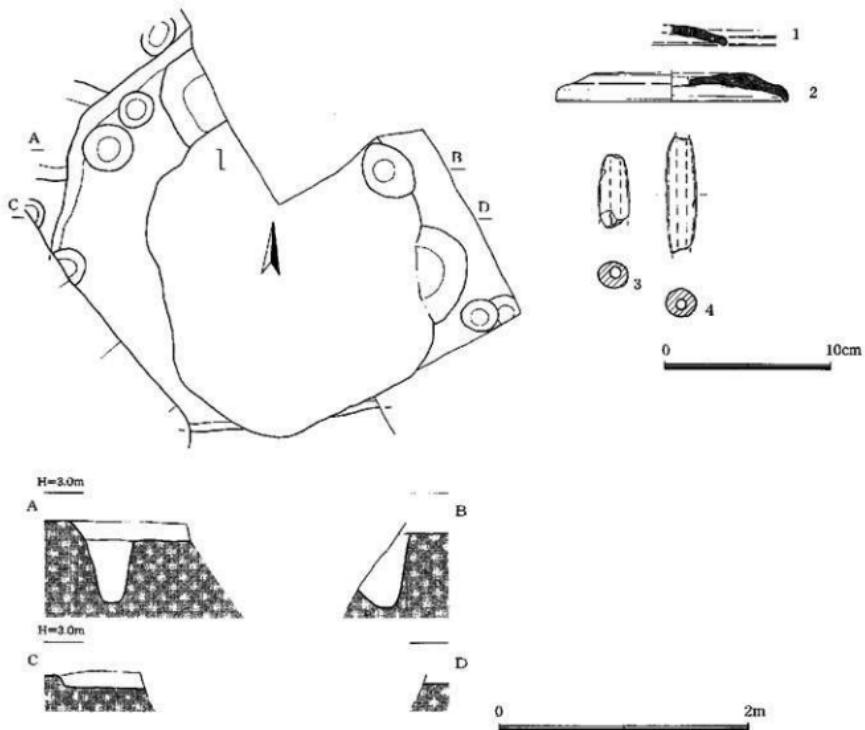
1・2は須恵器蓋である。口縁端部を嘴状に折り曲げる。2は天井部外面に回転ヘラ削りを施し、ボタン状のつまみが消失する。3・4は土錐である。いずれも欠損品である。孔径6mmを測る。

#### 2) 井戸

井戸は2基確認している。いずれも古代に位置付けられるもので、井戸枠部分は方形の板組みを行っている。

#### SE02(第7図)

調査区北東隅で検出する。土層確認の結果SC01を切る遺構であることを確認した。掘り方平面形は2.1×2.5mの隅丸方形に近いプランである。検出面から底面までの深さは1.1mである。標高2.2m付近で掘り方西側に平坦面を有し、このレベルで内法が一辺72×63cmの方形に組んだ縦板組みを確認する。なお井戸枠は各面をA～D面と仮称する。縦板は現状で厚さ3cm、残存高13cmを測る。またこの内側に内法70×58cmの横板組みが認められる。板材は厚さ5cm、幅は現状で12cm、長さはA・C面で60cm、B・D面で75cm程度の板材を使用していたものと考えられ、腐食が著しいため板材の接着面には加工痕跡は認められない。内側横板組みと同一面で内部に径40～45cmの曲げ物が据えられている。曲げ物は高さ23cmを測る。更に曲げ物設置面で、もう一組の横板組みが検出された。板組みはやや歪んでい

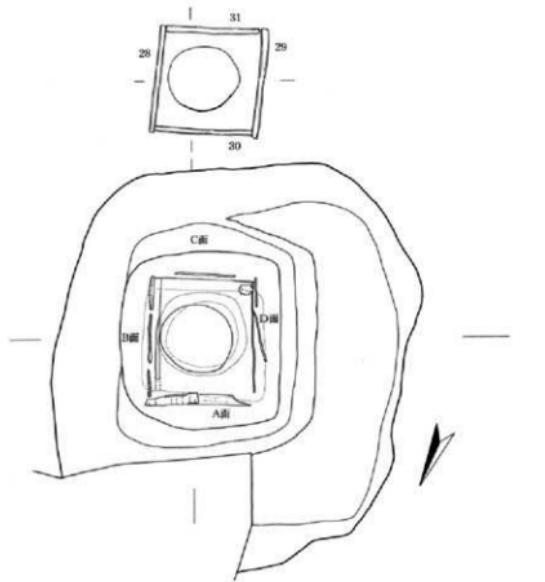


第6図 SC01実測図および出土遺物実測図(1/40,1/3)

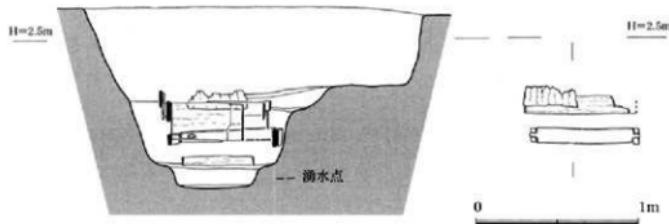
るが内法で60cm弱を測る。使用材は厚さ3cm、幅はA・B面では7.5cm、C・D面では9.5cm、長さ約65cmを測る。方形に組む際にA・Cの2面の材は端部を凸字状、B・D各面の材には凹字状の加工が施されている。またC面の材にはホゾ穴が穿たれている。またこの下位には高さ5cmの曲げ物がもう一段据えられている。これは上段の曲げ物よりやや西側にずれているが内径はほぼ同じである。上段の曲げ物内の埋土は暗灰色土でその底面では黄褐色粗砂が堆積している。また下段の板組みから下段曲げ物上面までは暗灰色粘質土と黄褐色砂の混合で、下段曲げ物内には淡黒褐色砂が堆積している。遺存状況および埋土の状況から上段の曲げ物と下段の曲げ物がつながっていたとは考えにくく、土層での確認を行っていないが新旧井戸枠の切りあいの可能性が高いと考えられる。この際上段の縦板・横板・曲げ物が新しい井戸枠、下段の横板組み・曲げ物が前段階の井戸枠であろう。またそれぞれの井戸枠に伴う構木は検出していない。出土遺物には土師器・須恵器があり8世紀前半代に位置付けられる。

#### 出土遺物(第8・9図)

5~11は井戸枠内部からの出土、12~27は掘り方の出土遺物である。また28~31は井戸枠使用木材である。5は土師器裏である。外面には擦痕状の縦方向のナデ、内面はヘラ削りを行う。6~10は須恵器蓋坏である。6の蓋には天井部外面に回転ヘラ削りを行う。7~10は高台付の坏である。高台は底面屈曲部分近くに貼付される。11は瓦であろうか。内面には布目が残る。外面には指印状の凹凸が多く残る。また外面は2次焼成を受けたような灰褐色を呈し、内面は暗赤褐色である。



A面井戸枠外面



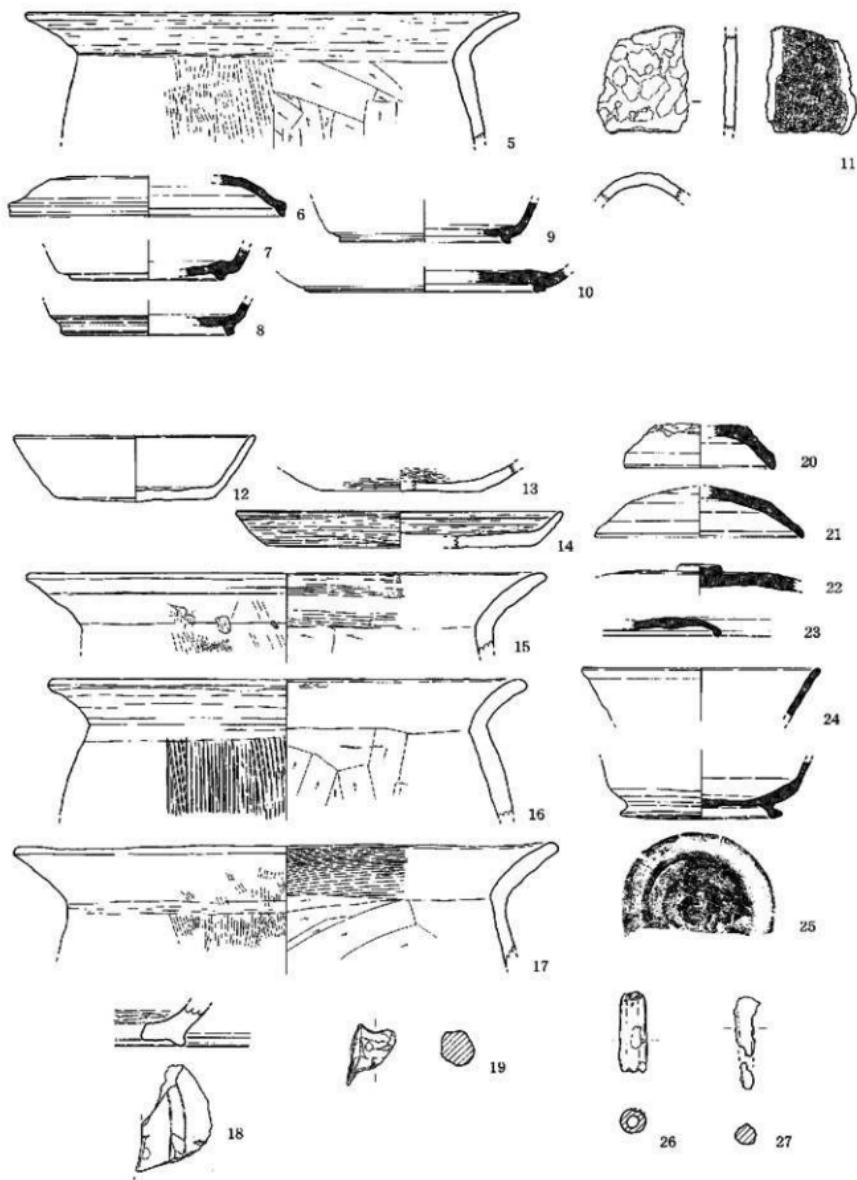
第7図 SE02実測図(1/30)



写真5 SE02-井戸枠は上段-(東から)

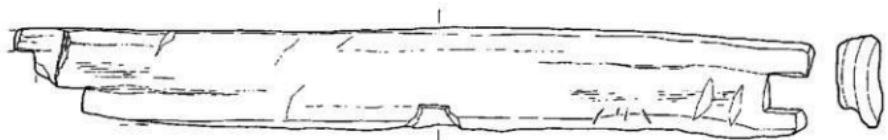


写真6 SE02下段井戸枠(西から)

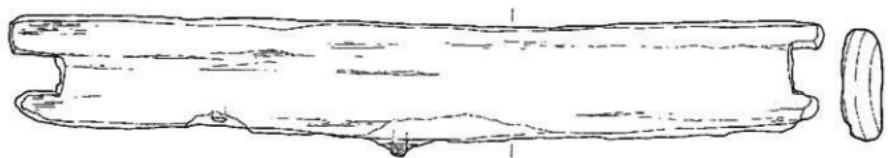


第8図 SE02出土遺物実測図1(1/3)

0 10cm



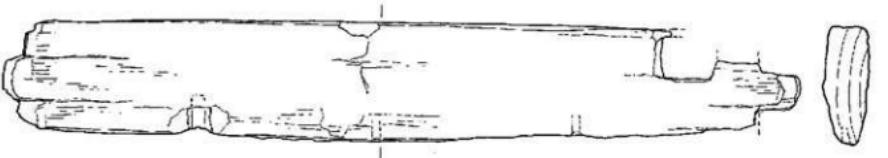
28



29



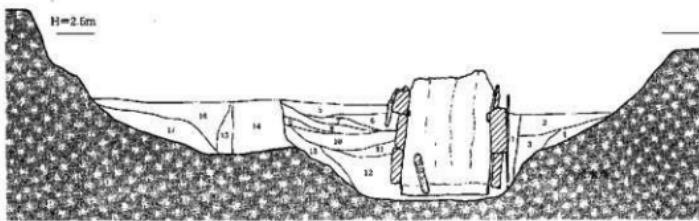
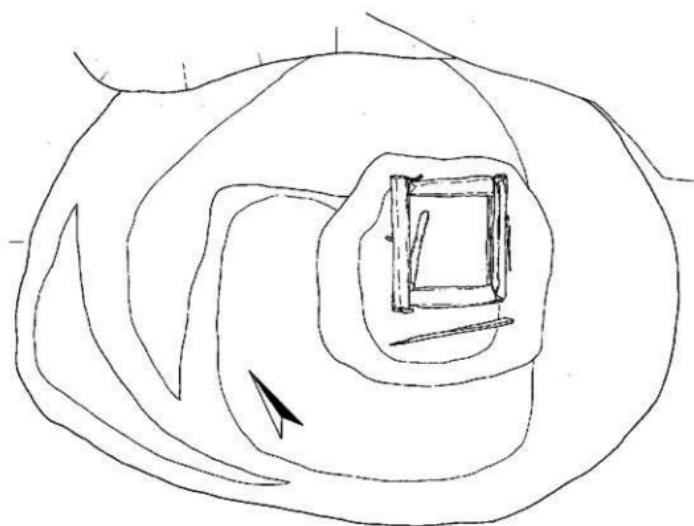
30



31

0 20cm

第9図 SB02出土遺物実測図2(1/4)



第10図 SE07実測図(1/30)

- |           |                        |
|-----------|------------------------|
| 1. 暗灰色砂質土 | 10. 灰色砂質土              |
| 2. 灰色砂質土  | 11. 暗黃白色砂              |
| 3. 淡灰色砂   | 12. 淡灰色砂               |
| 4. 暗黃褐色砂  | 13. 10層よりやや暗い          |
| 5. 2層に同じ  | 14. 淡灰色砂に暗灰色土ブロックが少量混入 |
| 6. 灰色砂    | 15. 暗褐色粘質土(木材の痕跡か?)    |
| 7. 黄白色砂   | 16. 褐色砂                |
| 8. 灰色砂    | 17. 黄褐色粗砂(やや汚れる)       |
| 9. 黄褐色砂   |                        |



写真7 SE07(北東から)



写真8 SE07土層(南西から)

12~19は土師器である。12は壺である。外底面はヘラ切りを行う。13~14は磨きを有する皿である。13は内外面に横方向の磨きを行う。14は口径19.4cm、器高4.4cmを測り、外面に横方向の磨きを行う。共に胎土は精良で、精製品である。15~17は甕である。いざれも胴部内面ヘラ削り、外面縦方向の刷毛目を行う。18は高台を有し、底面は焼成前に植木鉢状に穿孔されている。調整は外面横ナデ、内面は横方向のヘラ磨きを行う。色調は赤褐色を呈する。19は小型の把手である。20~25は須恵器である。20~23は蓋である。20は天井部外面に手持ちのヘラ削りを行う。21~23は天井部ヘラ切りである。22はボタン状のつまみを有する。24~25は壺である。26は高台が外方に開く。外底面はヘラ切りでヘラ記号を有する。26は土錘である。27は鋸化が進み形状がやや不明瞭であるが、頭部のつぶれ方から鉄釘と考えられる。

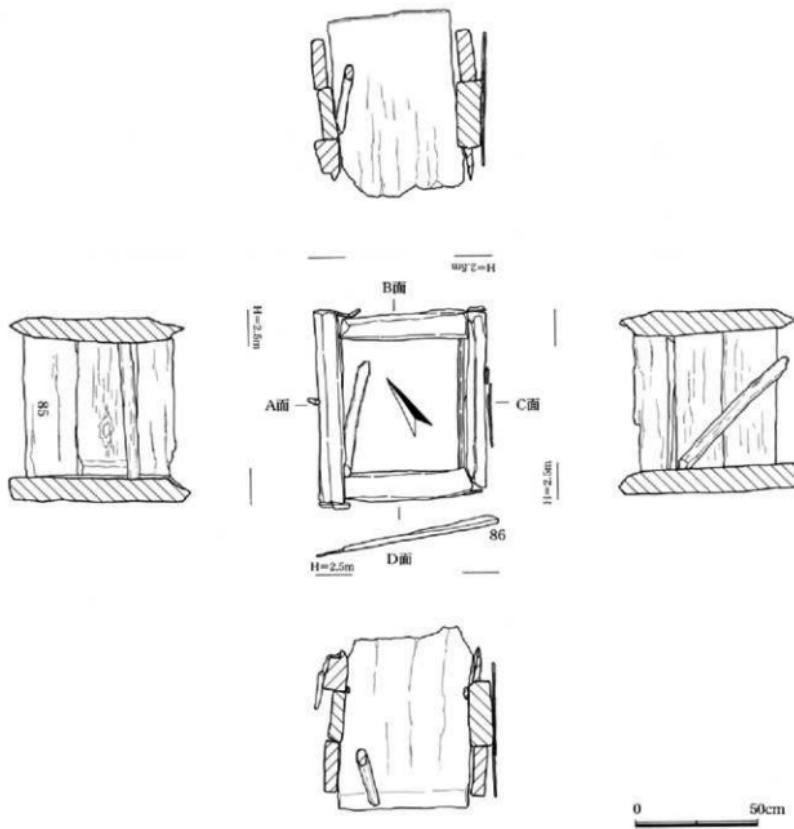
28~31は下位の横板組みに用いられた構築材である。順にB・D・A・Cの各面に使用されていたものである。いざれもスギの板目材である。28~29は両端部を凹字状に刺り込んでいる。28は側面に1ヶ所釘状の鉄器及び釘抜き穴状の孔が1ヶ所残存している。30~31は両端部を凸字状に削り出している。31は側面4ヶ所に穿孔もしくは釘穴が残っている。また、ホゾ穴が1ヶ所認められる。

#### SE07(第10~12図)

調査区中央東端で確認する。一部搅乱で欠失するがおよそ平面3.9×2.8mの隅丸長方形を呈し、検出面から1.15mで底面に至る。掘り方の東側にやや偏って井戸枠が構築される。井戸枠は方形縦板・横板組みで隅木は使用していない。井戸枠を北西側からA~D面と仮称して説明を加える。まずB・D面は厚さ10cmの縦板を使用している。上端は失われているが現状で残存長各75cm・66cmを測る。B・D縦板間には井戸枠底から50cmの位置で両側に桟木が渡されている。桟木接着部分は縦板にホゾ穴が穿たれている。更にD面内面には桟木を支えるように棒材がかまされている。D面の10cm外側には板材が底面から据えられている。また縦板材を挟み込んで持たせかけるようにA・C面には幅20~25cm、長さ75cm前後の横板が3段残存している。縦板との接着面外側には土止め用の板材が当てられている。更にA面外側には棒材、C面外側には板材がそれぞれ背後の支えとして据えられている。井戸枠内部の埋土は灰色粘質土である。出土遺物には土師器・須恵器のほか掘り方内から獸骨(馬の歯)・土錘、井戸枠内部から鉄器が出土している。掘り方からは7世紀後半~末と考えられる遺物も出土しているが、新出土物から8世紀前半に位置付けられる。

#### 出土遺物(第13~15図)

32~37は井戸枠内出土、38~84は掘り方出土、85~88は井戸枠に使用された木材である。



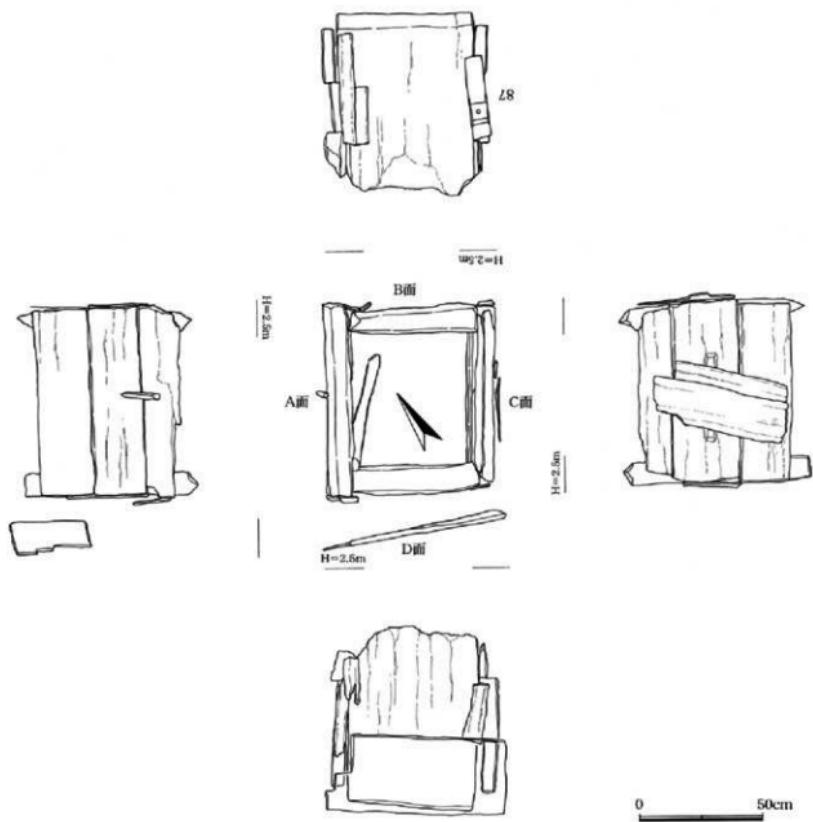
第11図 SE07井戸枠内面実測図(1/20)



写真9 SE07井戸枠内面(南東から)



写真10 SE07井戸枠内面(南西から)



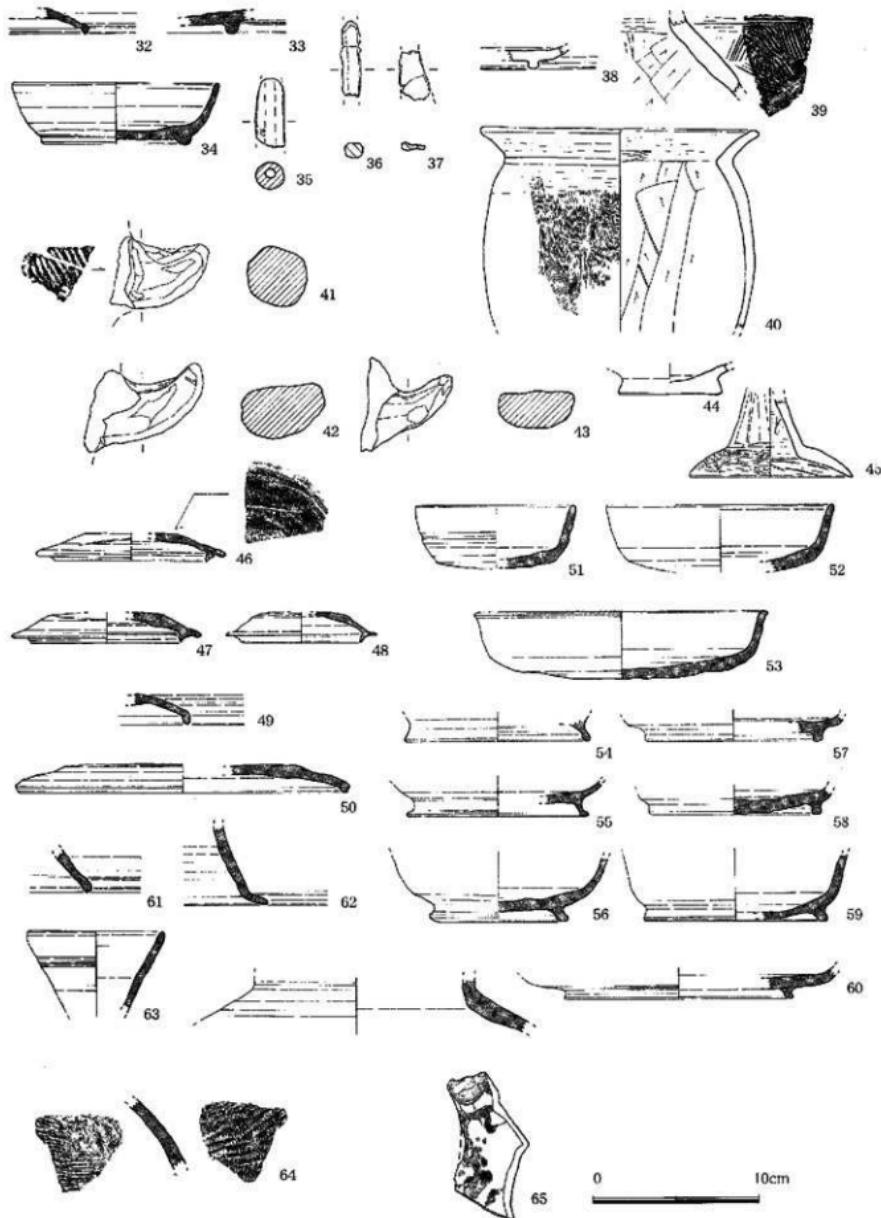
第12図 SE07井戸枠外面実測図(1/20)



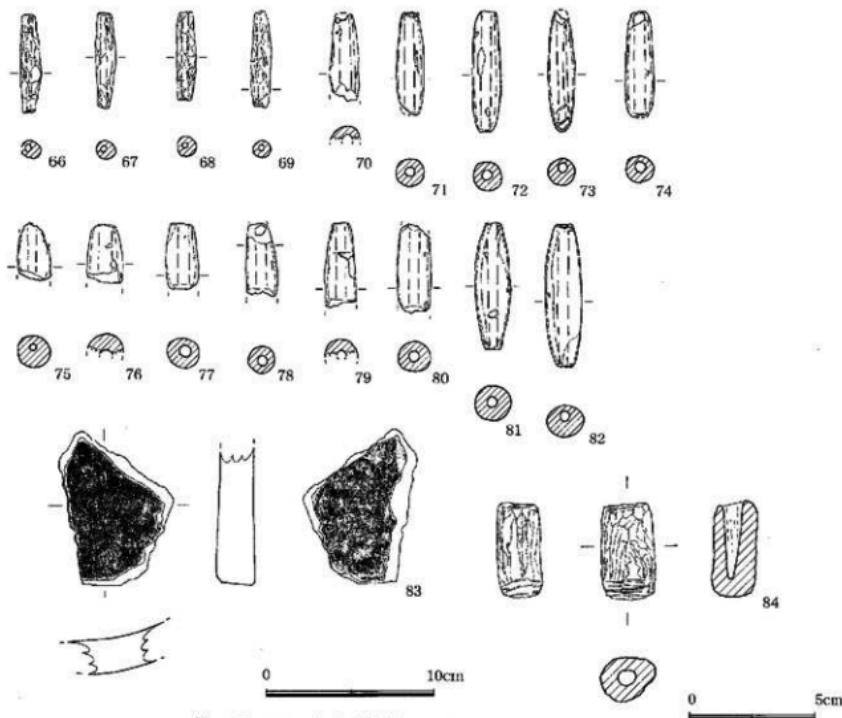
写真11 SE07C面外面(南東から)



写真12 SE07A+B面外面(北から)



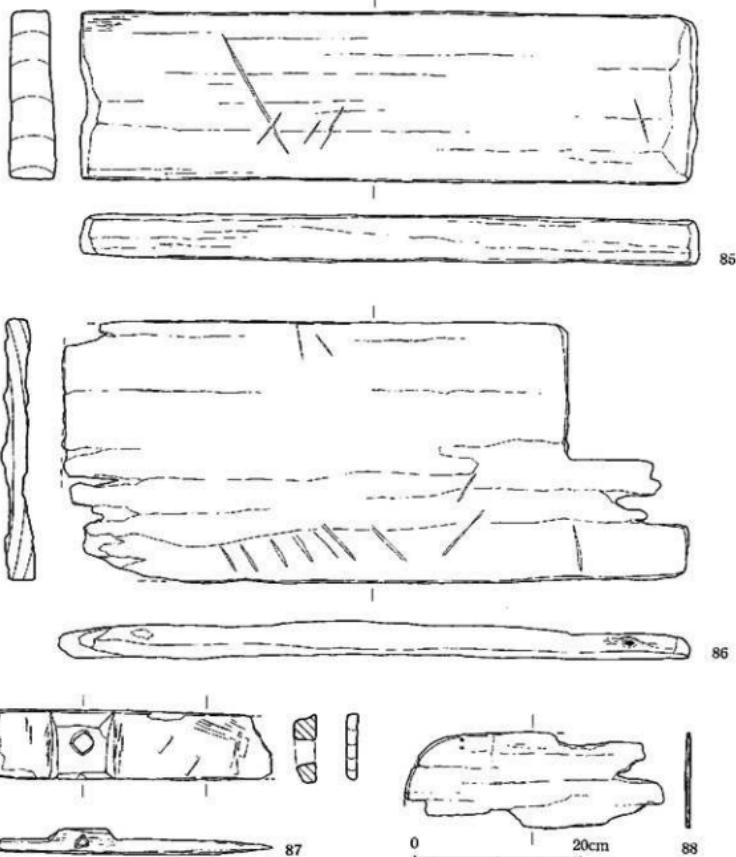
第13図 SE07出土遺物実測図1(1/3)



第14図 SE07出土遺物実測図2(84は1/2、その他は1/3)

32～34は須恵器蓋坏である。32は焼成がやや軟質で赤褐色を呈する。32の外底面は回転ヘラ削り、33は外底面ヘラ切りである。35は土錐である。36・37は鉄器である。36は8mm角の茎状の棒状製品である。37は厚さ2mm以下の扁平な板状品である。現状では明瞭な刃部は見られない。

38～43は土師器である。38は高台付き坏である。39・40は甕である。外面刷毛目、内面ヘラ削りを行う。41～43は把手である。41には内面に平行の當て具痕が残る。44は弥生時代前期前半の小壺底部である。外面に黒色顔料が観察できる。45は高坏脚部で、外面には磨きを行う。46～65は須恵器である。46～50は蓋である。46～48はかえりを有する蓋である。46・47は天井部外面がヘラ切り、48は回転ヘラ削りを行う。49・50は口縁端部を折り曲げている。51～60は坏である。51～53は無高台である。52は高坏の可能性も残る。51は外底面手持ちのヘラ削りを行う。53は外底面ヘラ切り後未調整である。口縁端部を僅かに外方に引き出している。54～60は高台を有する。高台には細く外方に張り出すものと、断面方形に近いものがある。61・62は脚裾部破片である。63は瓶の口縁部である。内外面全体に自然釉がかかる。64はたたき痕を有する。甕胴部破片である。内面が被熱のため発泡している。65は甕である。肩部内面に墨跡状の痕跡が残るが詳細不明である。66～82は土錐である。66～69は長さ5.7cm前後、径1.3cm前後、である。胎土は精良で、外面向に細かな指頭痕が残る。70～82は平面鋸鋸形を基本とするものである。長さ6cm／8cm前後の2種類が存在する。83は平皿である。内外面をヘラ状工具によるなでを行う。84は鹿角製の把手である。外面は細かな削りを行い、磨き状を呈する。



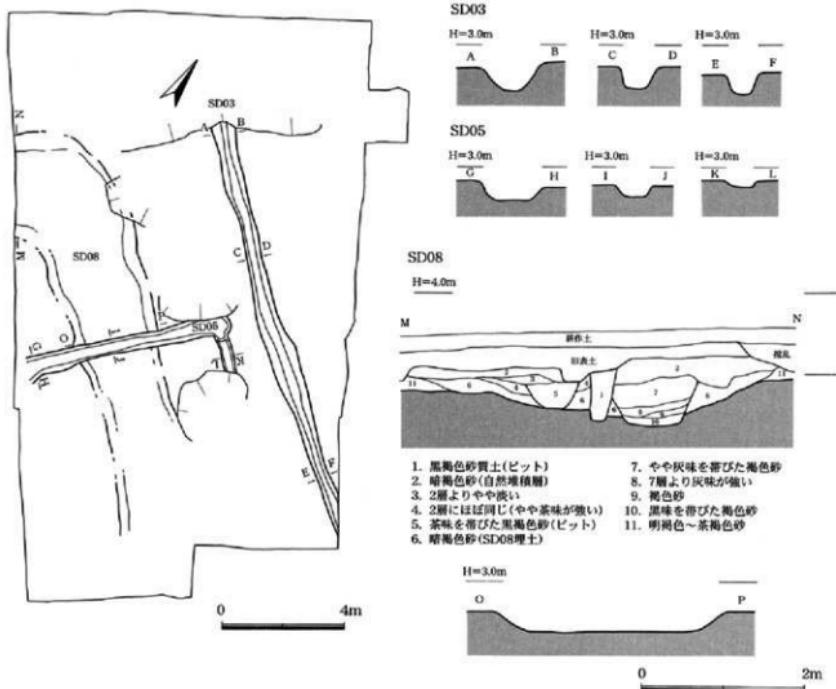
第15図 SE07出土遺物実測図3(1/6)

85はC面井戸枠最下段の横板である。スギの柾目材を用いている。86はD面背面に据えられていた板材である。スギの板目材を用いる。87はB面裏側の井戸枠接着面に添えられた板材である。片面に8cm角で1.3cm程厚みを増す部分を有する。88はスギ板目材であろうか。2個1対の穿孔が1組残存しており、1孔には桜皮の留め具が残存している。容器の蓋であろうか。

### 3) 溝

#### SD03(第16図)

調査区東側で検出する。主軸方位をN-51°-Wにとりほぼ直線的に延びる。幅50~100cm、検出面からの深さ30~50cmを測り、断面は浅皿状を呈し底面は緩やかにくぼむ。埋土はややしまりのない黒褐色土~黒味の強い暗褐色土である。古代~中世前半代までの整地層(東壁11層)上面から掘り込まれ



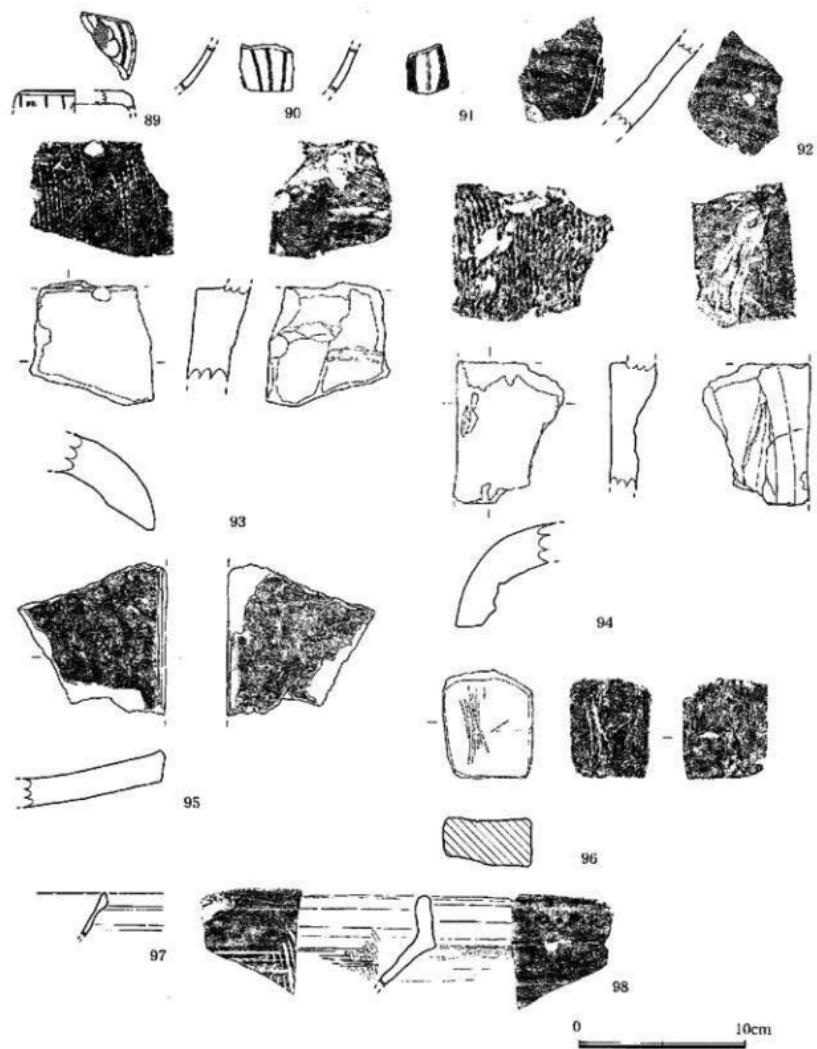
第16図 SD03・05・08実測図(1/160, 1/60)



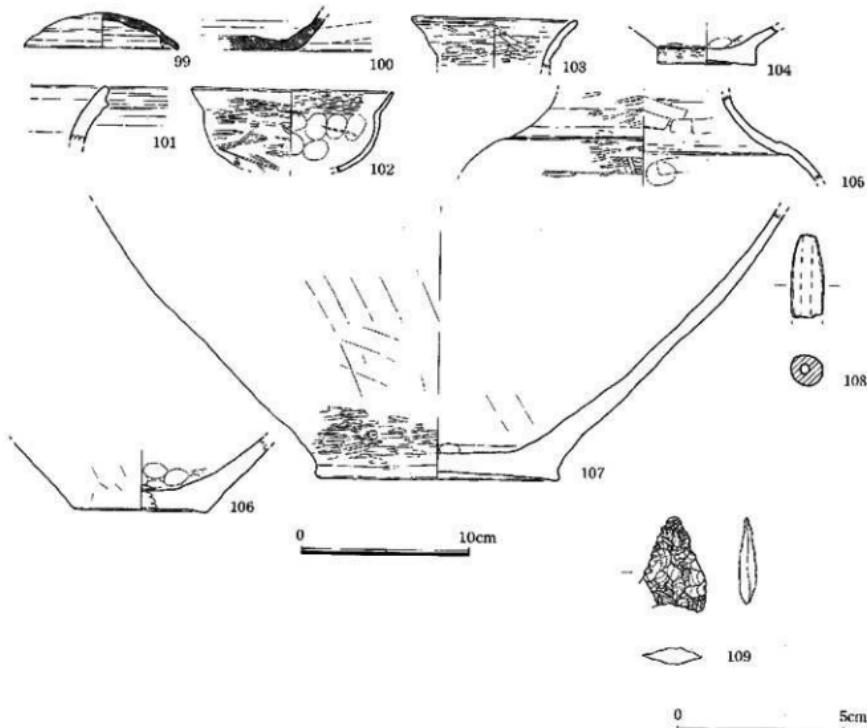
写真13 SD08(南東から)



写真14 SD08土層



第17図 SD03-05出土遺物実測図(1/3)



第18図 SD08出土遺物実測図(99~108は1/3、109は2/3)

ている(第5図参照)。出土遺物の多くは古代に属する土師器・須恵器であるが、時期を示すものとして青磁・白磁・すり鉢などが出土している。時期的には中世前半代に位置付けられるものと考えられ、砂丘落ち際を造成後に掘削されたものと考えられる。隣接する東光院内の調査(吉塚遺跡第8次調査)では、12・13世紀代の瓦を多量に包含する造成土が砂丘縁辺部分で確認されており、SD03もこれに近接する時期と考えられ、東光院に関連した遺構の可能性も考えておきたい。

#### 出土遺物(第17図 89~96)

89は青白磁の蓋である。外面にはヘラおよび櫛描きによる花文を施す。90は同安窯系の青磁碗である。外面に片彫りの文様を施す。91は鍋連弁の龍泉窯系青磁碗である。92は瓦質のすり鉢である。93・94は玉縁式の軒丸瓦である。共に玉縁部分を欠失し、凹面に布目、凸面に繩目が残る。95は燃しを行う平瓦である。96は砥石である。長側面を含む4面を砥面とする。

#### SD05(第16図)

調査区ほぼ中央部分で検出する。切り合い関係はSD08→SD05→SK81となる。幅40~60cm、検出面からの深さ10cm前後である。埋土は黒褐色砂で断面浅皿状を呈する。方位をN-44°-EにとりSD03にほぼ直交し、この1m手前でL字状に折れ曲がる。出土遺物には陶器、土師器皿・坏小破片が

ある。位置関係や時期が近接していることからSD03と関連をもった溝と考えられ、間仕切り状の機能を有する可能性が考えられる。

#### 出土遺物(第17図 97・98)

97は口縁端部を玉縁にする白磁碗破片である。98は陶器のすり鉢である。

#### SD08(第16図)

調査区西側で確認する。溝幅2.5~3.4m、検出面からの深さ20~35cmを測る。断面は浅皿状を呈し、底面は中央が緩やかに窪む。埋土は北側が暗褐色砂、南側が黒褐色砂を呈する。調査区西壁際から矩形に南側に折れ曲がり、10m延伸したところで砂丘落ち際の包含層と重なり、これより以南が土層によっても確認できなかった。弥生時代前期~古代の遺物が出土しており、詳細な時期は決めがたい。当初形状から方形周溝墓の可能性も考えたが、主体部は調査区内では確認できず、古墳時代初頭前後の遺物も少量である。

#### 出土遺物(第18図)

99・100は須恵器である。99はかえりを有する蓋である。100は無高台の壺で外底面はヘラ切りである。101は上師器壺の口縁部である。102は小型の壺である。胎土は精良で外側に横方向の磨きを行う。103~105は弥生時代前期の小壺である。いずれも丁寧な磨きを行う。105は外側に赤彩色が僅かに観察できる。106・107は壺底部である。106は外側縦方向に板状工具によるなでを行う。107は外側縦方向の擦痕の後底部付近のみ横方向のヘラ磨きを行う。108は約2/3が残る土錘である。109は黑曜石製の石鎌である。

#### 4) 土坑

##### SK09(第19図)

調査区南端部分で検出する。東壁14層除去後に検出し、15層上面にのる遺構である。平面は1.2×0.8mの比較的均整の取れた隅丸長方形を呈するが、底面には凹凸を有する。上層埋土は粘性が強く、下半埋土は砂である。土師器、須恵器、土錘が出土する。

#### 出土遺物(第20図 110)

略完形の土錘である。外径3.3cm、孔径1.6cmを測る。

#### SK24(第19図)

調査区西側隅で検出する。長軸1.1m、短軸0.5m、検出面からの深さ40cmを測る。平面形は均整の取れた隅丸長方形を呈する。出土遺物は染付・青磁・土師器・須恵器小破片である。

#### 出土遺物(第20図 111・112)

111は染付けの口縁部破片である。明代のものか。112は白色の石製小玉である。外径1.5cm、孔径4mmを測る。

#### SK27(第19図)

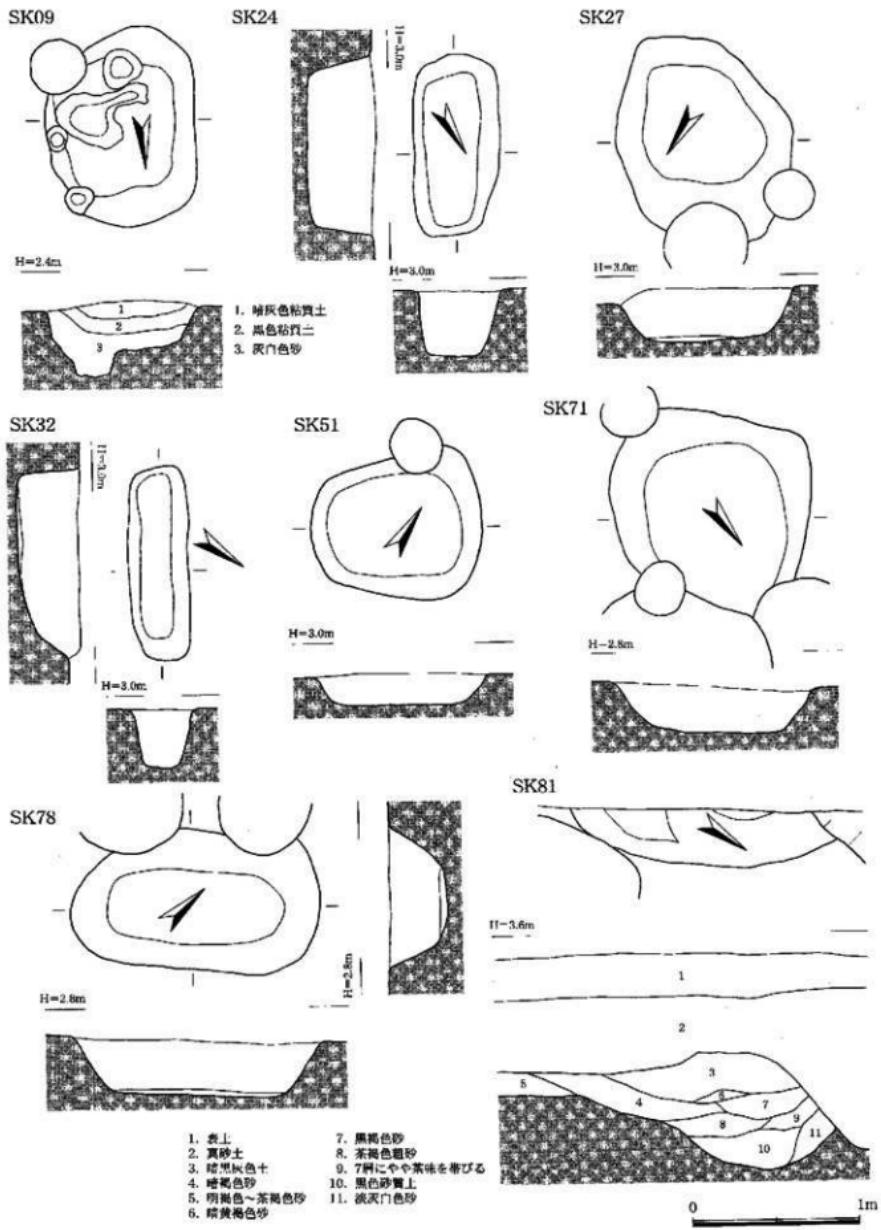
調査区西側隅で検出する。北側をSP26に切られる。径1.1m前後の不整円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。埋土は暗褐色砂である。出土遺物には内面ヘラ削りを行った土師器壺破片がある。

#### SK32(第19図)

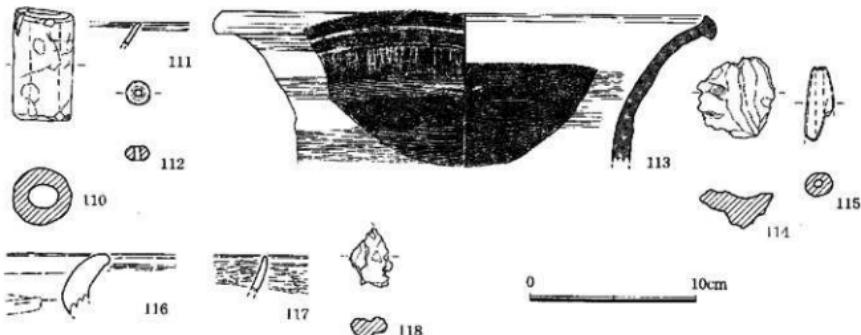
調査区中央西側で検出する。長軸1.15m、短軸0.35m、検出面からの深さ40cmを測る。平面形は均整の取れた隅丸長方形を呈する。埋土は黑色砂である。出土遺物は土師器・須恵器の小破片のみである。

#### SK51(第19図)

調査区西側隅で検出する。1×0.85mの略隅丸方形を呈する。検出面からの深さ20cmを測る。埋土は灰褐色砂である。出土遺物には土師器・須恵器・鏡治溝がある。



第19図 土坑実測図(1/30)



第20図 上坑出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第20図 113~115)

113は須恵器甕口縁部である。外面にカキ目状の痕跡が残り、外面には縦方向のヘラ描き文様が施される。114は楕円形鍛治済である。115は1/2を欠失した上鉢である。

**SK71(第19図)**

調査区北側で検出する。SK04およびSD03に切られるが、一辺1.2m前後の略圓形を呈する。検出面からの深さは25cmを測る。土師器小破片、鍛治済、軽石が出土している。

出土遺物(第20図 116~118) 116は土師器甕口縁部破片である。端部は外反し、内面はヘラ削りを行う。117は小型壺の端部である。内外面に横方向のヘラ磨きを行う。118は鍛治済であろう。

**SK78(第19図)**

調査区中央部分で検出する。SD05に切られる。長軸1.5m、短軸0.8mの長円形を呈する。検出面からの深さ30cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物は土師器・須恵器小破片がある。

**SK81(第19図)**

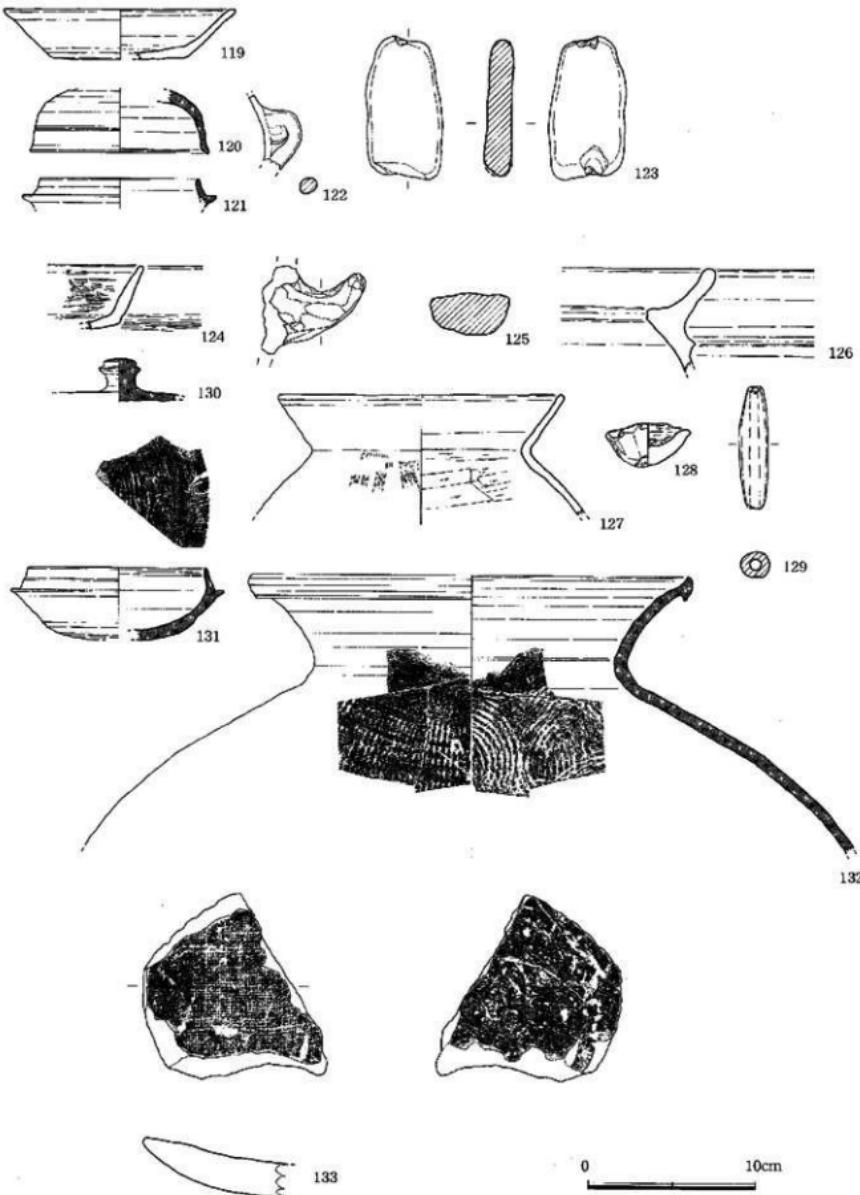
調査区西側中央壁際で検出する。北側を擾乱されており、形状は不明瞭であるが、南側に一段平坦面を有し、北側が深くなっている。遺物は土師器・須恵器のほか、同安窯系青磁破片が1点出土している。

### 5) 包含層出土の遺物(第21・22図)

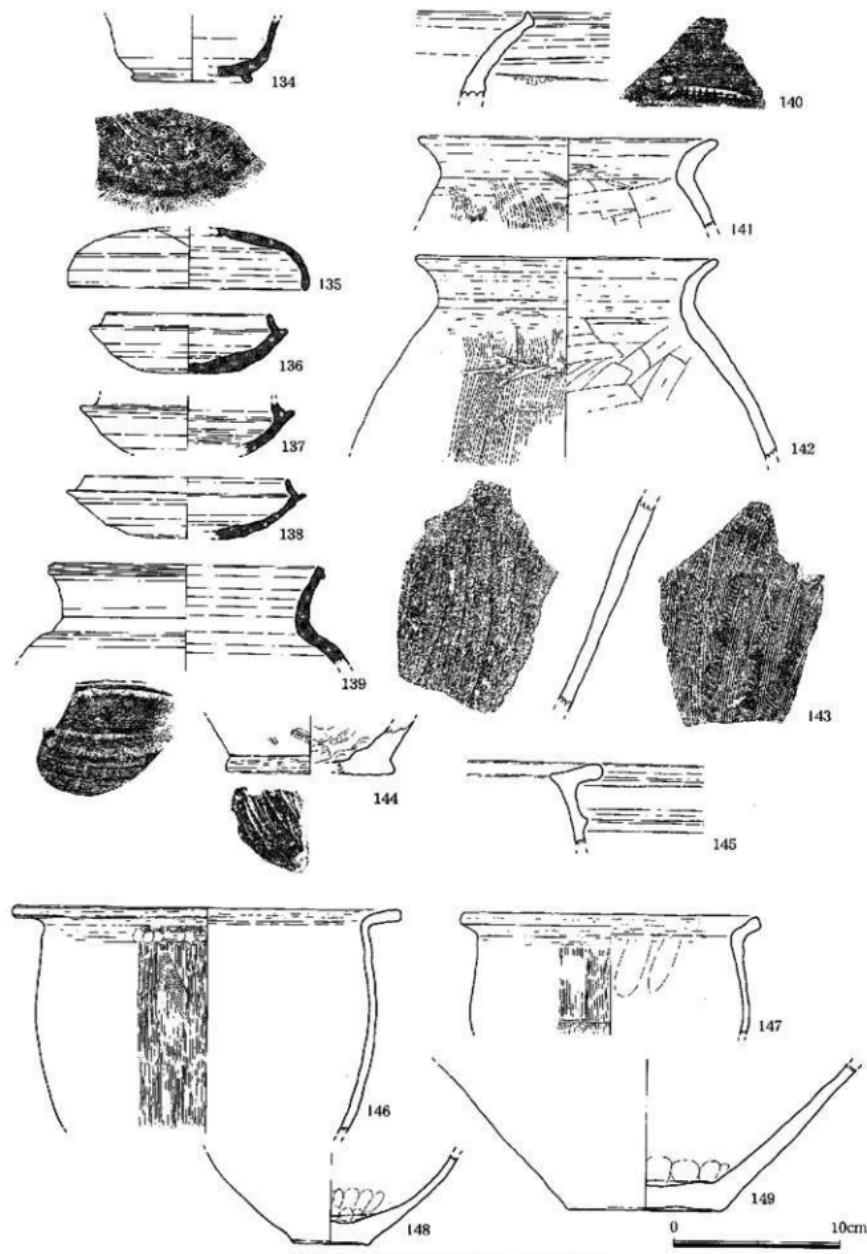
南側の砂丘落ち際に堆積した包含層・整地層、砂丘上部堆積包含層からも遺物が出上している。包含層は大きくⅠ～Ⅲ層に分けることができる。Ⅰ層は第5図東壁11層、西壁32層にあたり最上層の整地土層である。中世前半代の遺構はこの上面から掘り込まれている。Ⅱ層は上半の整地層(東壁12・13層、西壁33層)と下半の自然堆積層(東壁14層、西壁12・34層)に分けることができるが、砂丘落ち際に堆積部分は調査時点では土色が類似していたために同時に掘り下げている。Ⅲ層は調査地点東側の砂丘落ち際に最下層に堆積した自然堆積層(東壁15層)である。

119～123は包含層Ⅰ層出土である。119は土師器壺である。外底面はヘラ切りによる。120・121は須恵器蓋壺である。122は須恵器把手である。123は両端面を打ち欠く石錘である。

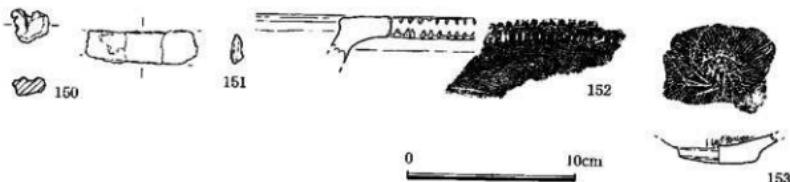
124～133は包含層Ⅰ・Ⅱ層出土である。124は土師器壺である。外底面は手持ちのヘラ削りを行う。内面は横方向の磨きを行い、外面はナデである。125は土師器把手である。126は弥生時代に属する内湾口縁の甕である。127は布留式甕である。128は手づくね土器、129は土錘である。130～132は須恵器である。130は蓋のつまみ部分である。131は壺身で外底面は回転ヘラ削り、内面にタタキ痕が残る。



第21図 包含層出土遺物実測図1(1/3)



第22図 包含層出土遺物実測図2(1/3)



第23図 その他の遺物実測図(1/3)

132は壺の上部である。133は焼成軟質の平瓦である。凹面には布目が残る。

134～143は砂丘上面に堆積する西壁12層対応の包含層(包含層Ⅱ層下半)から出土した遺物である。この部分では造構を不明のまま包含層として掘り下げを行っているものもあり、本来の包含層出土遺物は不明である。134～139は須恵器である。134は高台付の壺である。135～138は小田編年Ⅲb～IV期の壺である。139は壺である。140～143は土師器である。140～142は壺で140には外面に板状工具の小口痕跡が残る。143は瓶であろう。外面縦刷毛、内面縦方向のヘラ削りを行う。

144・145は包含層Ⅱ層出土である。144は底部破片である。底面および外面に条痕が残る。突帯文期を前後する時期のものか。145は鰐形口縁部の破片である。

146～149は包含層Ⅱ・Ⅲ層出土遺物である。146・147は壺上半部破片である。外面に縦刷毛を行い、内面はナデている。148・149は壺の底部破片である。

#### 6) その他の遺物(第23図)

150はSP53出土の鉄滓である。鍛冶津であろうか。151はSP69出土の鉄製品である。現状で残存長6.5cm、幅2cmを測る。152はSP97川土の壺口縁部破片である。端面に刻み日を施す。153は調査区壁面から採集した遺物である。壺底部である。外面には円盤を貼り付け、内面には螺旋状の押圧痕跡が残る。

#### 7) 小結

今回の調査では吉塚遺跡群における砂丘縁辺部分の様相の一部を把握することができた。ここで簡単に調査概要をまとめておきたい。調査区南東側で後背地に向かい東側に傾斜する砂丘の落ち際を確認した。この部分は弥生時代中期後半の遺物を包含する自然堆積層(包含層Ⅲ層・Ⅱ層下半)上部に確認された造成土により後背地を埋め立てている。なお自然堆積層と考えられる包含層Ⅱ層下半部については調査時の不手際のため遺物の混入が多く見られるため堆積時期は不明である。出土遺物は古代の遺物まで見られ、古墳時代後期の須恵器類が多く出土している。周辺の調査事例からもこれらの遺物は造構に伴う可能性が高く、包含層形成時期は更にさかのぼるものと考えられる。また北側の砂丘部分については後世の削平によりほぼ平坦となり旧地形の復元は困難であるが、砂丘上面に包含層(西壁12層)が堆積している。砂丘上から出土する遺物は弥生時代前期、古墳時代前期に位置付けられるものが少量確認できるが、造構として明らかとなるのは古墳時代後期からである。この後出土遺物量からみても古墳時代後期～古代にピークを迎えており、古代にはSE02-07が構築されている。本遺跡北西側の堅粕遺跡群では公的施設の存在も想定させる造構・遺物が確認されている。更に吉塚祝町遺跡からは多くの越州窯系青磁、吉塚遺跡群内でも滑石製権(3次調査)等が出土している。また歴史地理学的な検討から調査地点南側を古代の官道が通過するとの想定も行わされており、該期の造構のあり方については今後周辺の調査事例を含めて検討する必要があろう。更にこの後、後背地の埋め立てが進む中世前半期には、隣接する東光院の存在が造構の形成に大きく影響を与えるものと考えられる。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第778集

**吉塚 8**

-古墳遺跡群第9次調査報告-

2003年(平成15年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区大神1丁目8-1

印刷 国崎美峰堂  
福岡市東区箱崎1丁目20-5